今週のズバリ こう見る Analysis

GOLD 金

エネルギーを溜め込む期間 NYダウの天井打ちが狙い

岡地（株）
東京支店
投資相談部
千葉 純平氏

金が動かないのは、ただ単にそこにとどまっているのではなく、次に動くためのエネルギーを溜め込んでいることを知れば、見方も変わる。この〝次への動き〟は、エネルギーを溜め込んだ期間に正比例する。

直近の東京金を見ると、今月は陰線月の公算大で、東京金はもう一度4、000円を挟んで上下50円を試しにくるだろう。そこは再度逆張り的な買い場になろうが、4、200円前後を上値に年内は頭重い動きが予想される。

月足を見れば、ニューヨーク金、東京金ともに上昇5波途上の3段上げ、その第2の押目を形成している点に気付く。押目形成期は銘柄を問わず、冴えない動きになるものである。まして、大相場の時ほどそうである。材料は定かではないが、今の押目形成期を越えた時に、金は18～20年辺りまで上昇トレンドが展開されるだろう。それが年内か年始なのかは判らないが、金の底打ちと今のニューヨークダウの天井がきれいに合致するはずである。

理想としては、今年12月から来年2月にニューヨークダウの20％前後の大きな調整を機に、ドル高・円安の巻き返しで、ニューヨーク金は1、150～1、250ドル、東京金も3、800～3、900円が本格的な大底となろう。この安値を買い拾っていきたい。

GOLD 金

金ETFから株に資金流出 東京金は3、000円割れも

岡安商事（株）
ファイナンシャルプロジェクト事業部
IS本部 次長
青山 真吾氏

ニューヨーク金期近の1、300ドル台は、リーマン・ショック以降の安値から11年の高値の戻り半値の水準で、居心地が良いように見える。ただ、対ドル円相場は5月以降、きれいな三角保合を形成しており、その保合からドルが上放れるような気配を見せるなど、ドル買い・金売りの環境が形成されている。

気になるのは、金ETF（上場投資信託）の減少に歯止めがかからない点。金ETFを売り、高値を更新している株式市場に資金をシフトする投資家は多い。また、景気回復の兆しを見せている欧州も金融緩和の可能性が高く、金ETFから株式市場への資金シフトが考えられる状況にある。欧米ともに金からの資金流出が起きやすい状況で、金価格の頭を押さえる要因となる。

足元はFRBの量的緩和縮小の動きに左右されよう。債務問題の混乱などで、緩和縮小は来年3月にズレ込むとの見方が多いが、直近の経済指標を見ると、景気回復を示すものが多く、年内に断行するとの声もある。もっとも、遅かれ早かれ緩和縮小が行われることは間違いなく、投機資金が金から遠のくことは確か。ニューヨーク金は3、000ドルを割り込む公算が大きく、東京金期先は3、000円を目指そう。

FOREX 為替

年内103円突破あり得る 円安基調が続く可能性高い

カネツFX証券（株）
コンサルティング部・部長・
シニアストラテジスト
藤田 茂氏

当面の動きとしては米国が量的緩和策を継続すると国債利回り低下に結びつき、ドルが売られる場面が想定される。逆に、雇用回復⇒量的緩和縮小となれば利回り上昇でドル買い要因になる。このように、円ドル相場は米国と日本の10年物国債利回りがカギを握っていることを覚えておきたい。

また、消費者物価指数のうち、『食料品及びエネルギーを除く』指数も要注意だ。これが上昇へ転じると円安基調が始まったことを確認出来よう。12月は前年同月比で輸入が増大し、消費者物価指数がプラスとなり、デフレ脱却期待もあって円安が助長される公算が大きい。

日本の貿易収支が赤字であることも円安の一因だ。12年11月以降、経常収支の悪化を背景に円安へ転じており、今年も赤字拡大となれば円安進行のスピードが速くなろう。対ドルでの円安より、欧州経済の回復を背景にした対ユーロ、資源需要増加による対豪ドルで円安となる可能性もある。

日銀の異次元の金融緩和策効果も無視出来ない。緩和額は10月末現在で約185兆円と4月4日現在の155兆円から大幅に増加した。長期国債の保有額も15年3月末には190兆円に達すると推測される。今後、緩和策を拡大すると、一段の円安になる。12月末には1ドル＝103円台の円安になっても不思議はない。